

人は、他の生物も同じですが、いつかはかならず死にます。それは分かっているのに死にたいと思う人はありません。

青少年時代はもとより、中年くらいまでは死は遠い先のことで、今は関係が無いと思います。生きているのが当たり前で、死は人ごとです。外国で戦乱があり、沢山の犠牲者が出ていると聞いても、何の感慨も起こりません。東日本大震災で2万人近くが死んでも、地震が届かなかった地方の人は、「ああ気の毒に…」と思うだけで、自分のこととは考えません。

普通はそれで差し支えないのですが、若い人でもガンや白血病などにかかることがあります。そうすると急に死が目の前に現れ、周章狼狽し、絶望に陥るばかりです。

人が中年を過ぎ、老年期、つまり65歳を超えますと、仲間の何人かは既に亡くなり、親が去り、葬儀に参列する機会も増えてきます。身の回りに死の影が漂ってくるのです。そうになると自分の死も思わない訳にはいきません。

そのとき、多くの方は、死ぬときはピンピンコロリと死にたい、と考えます。ガンなどで苦しんで死にたくない。苦しいのはまっぴらだと思えます。最も嫌うのは長患いです。長患いをして死ぬのは、人の世話になり惨めだし、何年も家族に迷惑をかけたくないからです。長患いをするくらいなら、いつそ死んだ方がいいと考えるのです。元気で90歳から100歳くらいまで生きて、苦しまずに静かに天寿を全うして世を去りたいと思うのです。

これはもっともな考えですが、長生きの末、苦しまずに死ぬ人は極めて少ないのが現実です。大多数の方は長患いの後に最後を迎えます。

後期高齢者は75歳からですが、ここまで来ると死生観がまた変わってくる人が多いようです。仲間が次々と世を去って行きます。自分の番もそう遠くないと予想し、それはもう仕方が無い、十分に生きたからと言う感覚になる人が多いようです。またその頃は、孫らヒコが生まれ、自分は仕事も無く、責任もないので、生きる意欲も低下してきます。もう、いつお迎えが来ても構わないと思う人もいます。生に対する執着は薄れてきます。

以上述べたことは一般論ですが、その通りにならない人も多いのです。しかし、一般論に従って論を進めましょう。皆様はこの論に賛成でしょうか。

宗教家は賛成ではありません。生と死をしっかりと認識していないと嘆きます。生と死をしっかりと考えないと、生が充実せず浅薄なものになると指摘しています。私は宗教家ではありませんが、医師ですから沢山の死を見てきました。その立場から見ると、上記の考えには誤りが多いと思います。

ピンピンコロリ、つまり急死は心筋梗塞や脳卒中、あるいは交通事故などですが、決して望ましい死ではありません。最悪の死と言うべきでしょう。

長患いを嫌うのも当たっていません。ほとんどの人が長患いを経て亡くなりますが、その間、痛みや苦しみは少なく、惨めとも感ぜず、そのままでも長生きしたいと思っています。長患いの末に亡くなる人が最も多いのですから、これを嫌う必要は少しも無いのです。

ガンも、現在の優れた医療を受ければ痛みや苦しみは殆どありません。急死や長患いよりもいいという人が増えてきています。

やはり、宗教家の言うように、生死をよく考え、生の重み、その意義、その貴重さを噛みしめ、しっかり生きることが大切だと思います。